



大田原赤十字病院
広報誌

NO.1

基本理念

かかってよかったと思ってもらえる病院に



院長 宮原 保之

あけましておめでとうございます。本年も宜しくお願いいたします。昨年は地域の皆様、医師会の先生方には大変お世話になりました。

昨年も多くの方々より励ましや感謝のお言葉を、またお叱りや苦言をいただきました。数々のご意見は、当院が「地域密着の基幹病院としてさらに充実し、地域の皆様より『かかってよかったと思ってもらえる病院に』になるように」とのご教授として、真摯に受け止め、検討させていただいております。

昨年は7:1看護、地域がん連携拠点病院の取得、また血管造影装置(DSA)、アイトープ診断装置(RI)を更新し、本年1月からは呼吸器外科が新設されます。

地域の皆様に支えられ、また職員の努力により収支も安定し、新病院建築計画も順調に進行しております。

本年も職員一同、より良い医療を提供できるよう「マイタウン・マイホスピタル」を目指し努力してまいりますので、皆様のご支援を宜しくお願いいたします。

目次

・オーストリア地域看護研修体験より	2
・大田原へようこそ～新着任医師インタビュー～	3
・初の看護部インターンシップを終えて ワンポイントアドバイス	5
・病診連携ネットワークシステムがスタート	7
日赤ニュース	8
・インフォメーション	8

基本方針

1. 患者さまの立場を尊重し、患者さまに信頼される病院をつくります。
2. 日々の研鑽を惜みず、医療の質の向上に努めます。
3. 保健・医療・福祉施設との連携を密にし、地域医療の発展につくします。

オーストラリア地域看護研修体験より

看護副部長・地域医療福祉連携課長
手塚美恵子

私は、平成19年10月20日から10日間、オーストラリアの北部をカバーする公立のホーンズビー・クーリンガイ病院と圏内の福祉施設で行われた地域看護研修に参加してきました。研修は、オーストラリアにおける医療提供体制、高齢者福祉ケアサービスの実際、看護師の教育など、多岐に渡る内容で進められました。一部ですがご紹介いたします。

オーストラリアでは、高齢化社会に向けて1985年に制度改革が行なわれました。「不必要な入院はさせない、可動性の維持を図る、入院せずにケアを受けられる環境を提供する」事を高齢者医療の共通概念とし、老人が一人暮らしでも出来るだけ在宅で自立した生活が送れるよう福祉サービスを制度化したのです。一人ひとりの状況に応じた、訪問看護・配食サービス・外出サービス・ディサービスなど多くのケアプログラムを使って、施設ケアから在宅ケアへの転換が進んでいるようです。家族支援プログラムもあり、無理なくケアに参加しています。また、多くのボランティアが配食サービスなどのケアに参加しております。60～70歳代の方もボランティアとして登録し、自分の出来る範囲で積極的に活動している姿が印象的でした。実際に、90歳代の一人暮らしの女性の訪問看護に同行させていただきました。「自分で出来ることは自分です」という自己責任姿勢をきちんと持ち、必要な福祉サービスをうけ、整理整頓されたお部屋で御家族の写真に囲まれ、穏やかな表情で生活されている姿を見せていただきました。



配食サービス

また、医療提供体制においては、医療機能分担がしっかり出来ています。地域の中にG P (General Practitioner) と呼ばれる総合診療医と、細分化された専門(specialist)が居ます。G P とは、日本の「かかりつけ医」的存在で、総合的診療を行い、地

域の専門医師又は病院施設の専門医師に紹介してくれます。専門医は、地域の中に自らの診療施設を持ちながら、契約している病院で自分の専門性が必要とされた時に、病院に出向きその力を発揮します。「かかりつけ医」の選択は、自由にできますが、専門医師の診療は基本的に紹介状なしには受けられません。日本でも、医療機関の機能分化と医療連携の重要性が話題になっているところですが、オーストラリアにおいてはその体制が出来ているのです。私たちの受療行動が、地域医療の存続や医療の質の向上に大きな力と成ることを強く感じた研修でした。



オペラハウスにて記念撮影

今、日本もオーストラリアの様に各医療機関がお互いに連携を持って地域の皆さんの健康を守ろうとしています。本当に必要なときに適切な医療が受けられる体制を確保するために、私たちも一人ひとりが「かかりつけ医」を持って、限りある医療資源を上手に利用しませんか。

今回、自然を大切に作るオーストラリアを全身で感じながら楽しい研修を受けさせていただきました。このような期会を頂いた事を深く感謝しております。

今回、自然を大切に作るオーストラリアを全身で感じながら楽しい研修を受けさせていただきました。このような期会を頂いた事を深く感謝しております。



現地スタッフと研修生 手塚副部長（前列最左）



大田原へようこそ ~新着任医師インタビュー~

2007.10月に着任された西田小児科部長へインタビューを行いました。



氏名
西田 光宏

出身
群馬県

出身大学
浜松医科大学

専門
小児科学会専門医
アレルギー学会専門医

—小児科を選ばれた理由は教えていただけますか？

こどもが好きだからです。

—仕事においてこだわりはお持ちですか？

やはり患者さんとの良い関係づくりが、医療の第一歩ですので、すべての点において患者さんとの信頼関係を基礎に診療していきたいと考えています。

—大田原赤十字病院での抱負をお聞かせください。

病診連携の充実と、二次救急病院としての役割を果たすことを目標としています。

—大田原赤十字病院の印象はいかがですか？

みなさん一生懸命働いていて、それぞれ責任を果たしている。働きやすそうな印象です。

スタッフの良い点としては、なんでも一生懸命なところですね。足りないところは、コミュニケーションが不足している点かもしれない。もう少し、お互いの連携や意見交換を活発にしたらよいのではないのでしょうか。

—大田原はどうでしょう？

地方の中核都市として、官公庁・交通など揃っているので生活しやすいところだと思います。ただ、寒いのが少し…。

—毎日忙しいと思いますが、休日はどう過ごされていますか？

ゴルフが好きなので、できるだけゴルフに行くようにしています。それから、スポーツジムに入って毎日運動するよう心がけています。

—最後に地域住民、患者さんへ一言お願いします。

今後、小児科医を増員して、地域で再びみなさんから信頼される日赤になるように努力したいと思います。



絵手紙

入田 和恵(医療情報管理課):作
「スイートピー
ねえほらそこに新しい風が」



大田原へようこそ ～新着任医師インタビュー～

2007.11月に着任された北岡産婦人科第二部長へインタビューを行いました。



氏名
北岡 芳久
出身
奈良県
出身大学
慶應義塾大学
専門
不妊症・内分泌、内視鏡手術、婦人科細胞病理診断

—医師になろうと思ったきっかけはなんですか？

今となっては同業ですが、幼い頃から父親の背中をみて育ちましたので、ずっと医師になりたいと思っていました。

—その中でなぜ産婦人科を選ばれたのですか？

女性の一生をトータルで診られる科であること、検査・診断から治療まで一貫して診療できること、内科・外科・小児科・麻酔科をはじめ関連分野が広いこと、分娩は産科医にしかできないという特殊性があること、などです。他の診療科は考えませんでした。

—仕事においてこだわりはお持ちですか？

コミュニケーションには特に気を使っています。患者さんやその御家族の方はもちろんですが、院内のあらゆる分野のスタッフの方に対しても同じ気持ちでいます。

—大田原赤十字病院での抱負をお聞かせください。

全国的に産婦人科医が減り、特に分娩を扱う周産期医療は大変厳しい状況です。大田原日赤も同様の状況であることを聞いておりましたので、少しでも力になりたいと思っています。日赤の産婦人科にかかれれば安心だ、と言っていただけのようにしたいですね。

—3度目の大田原赤十字病院ですがいかがですか？

前回の赴任時はオーダリングシステムやクリニカルパス（医療の標準化ツール）が始まったばかりでした。当時と比べてずいぶん機能が充実していますね。それと、以前と同様ですが、スタッフはみなさ

り優しい人ばかり。知っている方もたくさんいらっしゃるので、仕事もやりやすいです。

ただ、医療機器の不足・老朽化も感じますので、必要なものに関しては少しずつ整えていただければと思います。

—大田原はどう思われていますか？

大田原は大好きです。第二の故郷だと思っています。そういう思いがなければ三度目の赴任は考えなかったですよ。

—毎日忙しいと思いますが、休日はどう過ごされていますか？

今はまだ余裕がないですが、時間があれば那須や塩原へ出かけたかったですね。

—日々の楽しみは何ですか？

仕事後に呑むお酒（日本酒・特に冷酒）です。医者の不養生にならないようにしないといけません。

—逆に苦手なものはありますか？

暑いのは苦手です。大田原の気候はその意味でも最適です。今日もこの格好ですから（11月インタビュー時半袖ポロシャツでした）。

—最後に地域住民、患者さんへ一言お願いします。

産科に関していえば、地域の皆さんが安心して出産できる病院でありたいと思います。前任地（亀田総合病院・鴨川市）では新生児集中治療室（NICU）でも仕事をしていたので、その経験も生かしたいと思います。

婦人科に関しては、病院である以上やはり手術が中心になるかと思っています。悪性腫瘍の治療はもちろんですが良性疾患に対する内視鏡などの低侵襲性手術にも力を入れていきたいと思っています。「産婦人科にかかるなら日赤へ」と思っていただけのように、これまで以上に頑張ってもらいますので、どうぞ宜しくお願い致します。

初の看護部インターンシップを終えて

看護部長
上杉みつえ



平成18年度診療報酬改定において、急性期入院医療に即した看護師配置基準「7：1」(従来の看護師看護師配置基準で1.4：1相当)が導入されました。この従来の2：1配置基準よりも高い設定により、全国の看護職の長年の願いが叶えられることとなったのです。

当院でも、より質の高い看護を提供するために、この配置基準を取得する方向になりましたが、その為には20人もの看護師の増員が必要となりました(当時)。しかし、平成18年4月新採用者確保は目標の40%に留まり、さらに平成19年3月に前橋赤十字看護専門学校の閉校に伴い、当院へ看護師の配属がなくなりました。従来から委託学生を中心に看護師確保を行ってきた当看護部としては厳しい状況となりました。

このままでは、現職看護師の過重労働、新築移転時の全病床開設が困難となってしまいます。看護師確保は、看護部だけでなく病院全体の取り組みとなりました。新たに導入したインターンシップを始め、学校訪問・就職説明会などを、医師や事務部の方々など他職種と連携し、従来に増して力を注ぐことになりました。

インターンシップとは、学生が在学中に、看護師



と行動を共にして、現場で実際の業務の流れを体験する「体験就業」、「体験入社」のことです。

当院では、医師、コメディカルの協力を得て2泊3日で行いました。参加した学生は、県内外から8名となりました。参加者たちには、最新の放射線手術や、救命救急センターでの救急医療などを見学し、就職1・2年目の若手先輩から、入職当時の不安、それをどのようにして乗り越えたかなどの経験談を聞いたり、明るく生き生きと働いている姿を見てもらいました。皆さんには、「大田原赤十字病院で一緒に働いていける」と実感していただけたようでした。

大田原赤十字病院始めて以来の、病院一丸となって取り組んだ看護師確保の結果、平成20年度は、昨年度より多い新採用の内定となっています。このような病院全体での看護師確保対策に、職員への感謝の気持ちで一杯です。

このように新たなパワーを得た看護部が、今後、病院に対して、地域に対して、どのような役割を果たす事ができるかが大きな課題となります。皆さんへ、できる限り多くのことを還元していきたいと思えます。

看護師募集

大田原赤十字病院で、私たちとたのしく働いてみませんか。

お問い合わせ

大田原赤十字病院看護部
☎0287-23-1122(代表)



ワンポイントアドバイス

リハビリテーション科 より

●転倒予防のマメ知識●

高齢者の寝たきりになる原因に、転倒による骨折があります。骨がもろくなってしまふ高齢者では、しりもちをつく程度の転倒でも骨折をしてしまいます。大腿骨頸部骨折(足の付け根、お尻のあたりの骨折)になると、長い間歩くことが出来ないため、寝たきりになりやすくなるのです。

転倒してしまう主な原因は、足腰の筋肉が落ちて足が上がりなくなり、つまずきやすくなるためです。予防のためには ① **筋肉をつける** ② **転ばない環境づくりの工夫**が有効です。

- ① 足を上げる筋肉をつけるために、座ったままで膝を挙げる運動をしましょう。ティッシュの箱をまたぐようにすると良いでしょう。(毎日片足50回ずつを目標に!)
- ② 小さな段差のほうが、かえって転ぶ原因となります。こたつ布団に足がからまないようにしたり、電気類のコードを引っかからないようにまとめたり、フローリングでは滑りにくいスリッパ、靴下を選ぶなど、細かな注意が転倒予防の大きなポイントになります。

※はじめはティッシュ箱を横にして、慣れてきたら縦にするとより強度が増します。



栄養課 より

●健康と食事●

生涯健康で、とは誰もが願うことです。日本は長寿の国といわれていますが、私たちがいくら長寿の遺伝子を持っていても過度のストレスが続いたり、食生活の乱れなどで生活習慣病を患ったりしては、健康で長生きは困難です。ストレスを減らし、食生活の改善を実現して、病気にかからない努力をしましょう。規則正しい生活、健全な食生活、腹8分、適度な運動、が健康を守る秘訣です。そして大切なのは、これらのことをどれだけ知っているかではなく、どれだけ実行するかです。

●食事は日本型が基本です●

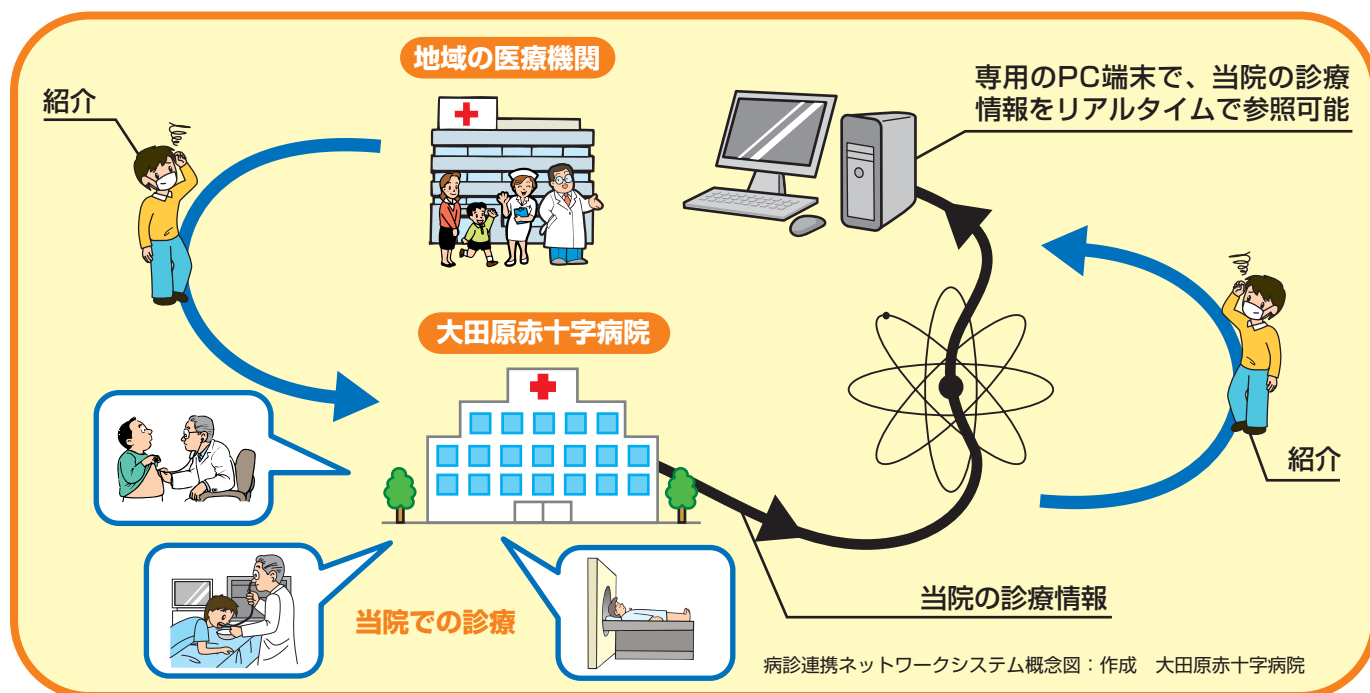
和食の長所は魚料理が多い、芋・海藻・きのこ・豆などの素材を量は少なくても多品目食べる、野菜をたっぷり食べる、ごはんを中心にいろいろなおかずを食べるなど。短所は乳製品が少ない、塩分が多いなどです。長所を活かし、短所に注意して、先人から伝わった日本食を見直しましょう。

●食事のとり方●

朝食は1日の大切な活力源。私たちのからだは一定の時間で栄養分を消費し、協力しあってからだのリズム作りをしています。中でも人間の脳は、定期的にブドウ糖を供給しないと活動できません。1食でも抜いてしまうと、そのリズムが崩れてしまいます。朝食を必ず食べましょう。ダイエットするなら、朝食と昼食はしっかり摂って、夕食は軽めに食べるのがコツです。

病診連携ネットワークシステムがスタート

地域医療福祉連携課



当院は、かかりつけ医の推進などを進め、地域の医療機関との連携強化を図り、自身の役割である急性期医療の提供に努めて参りました。このたび、地域医療支援病院、がん診療連携拠点病院に認定されたことを受け、地域医療連携を更に強化するため、新たに「病診連携ネットワークシステム」を稼働させることになりましたので紹介させていただきます。

病診連携とは、“病”＝病院と“診”＝診療所が連携して患者さんの治療に当たることです。患者さんの状態により、地域の病院と診療所が役割や機能を分担し、より適切な医療を効率的に提供することをいいます。

「病診連携ネットワークシステム」は、インター

ネットを利用し、診療情報の共有化を図ることを目的としています。当院と地域の医療機関をインターネットで接続し、当院に紹介された患者さんの同意のもと、当院で行なった検査などの診療情報を地域の医療機関の先生方が参照できるというものです。これにより、地域の医療機関の先生方は、当院での患者さんの診療経過を日常的に把握することが可能となります。患者さんは、当院での診療が終了し、地域の医療機関に帰った場合でも、そのまま継続した診療が受けられることとなります。そのため、地域医療連携の中、診療情報の共有化を実現し、患者さんは途切れることのない安全で良質な医療の提供を受けられることになり、このシステムが病診連携の更なる強化につながるものと考えております。

● ● インフォメーション ● ●

2008年1月より『呼吸器外科』が開始されました。

受付時間 13時00分～15時00分

場所 1階脳神経外科外来

診察時間 13時30分～16時50分

毎週 火・金曜日

⚠ 初めて当院へかかる場合は他医療施設等からの紹介状をご持参ください。(紹介状をお持ちでない場合は、特定療養費2,100円が別途負担となります。)

＋日赤ニュース＋



大田原赤十字病院が生まれ変わります。

私たちの街の大田原赤十字病院として、「マイタウン・マイホスピタル」をキーコンセプトに新築移転を決定いたしました。当院の老朽化・狭隘化などの問題を解決するため、地域によりよい医療を提供するため、建築準備委員会を中心に計画を進めていきます。

2007年7月に発生した新潟県中越沖地震災害地へ、当院の救護班が派遣されました。現地のスタッフらと協力し、被災者の診察や健康相談、こころのケアを行いました。

当院では、いつ派遣要請がきても対応できるように、救護班が編成されており日々トレーニングを積んでいます。



広報誌名由来

大田原市は、江戸期初期まで「大俵」と表記されていました。一説に、多くの俵を積むほど米が収穫されたことから付いたと言われていました。現在も県内随一の米の生産高を誇っており、まさに「大俵」。豊かな自然と実りのイメージから、地域の繁栄と当院の未来へ祈りをこめて『たわら』と命名しました。

編集後記



皆さま新年あけましておめでとうございます。

当院広報誌は「大田原赤十字病院だより」として長年愛読いただいておりますが、この度新たに「たわら」として生まれ変わりました。

患者さんをはじめ地域の皆さんに当院の情報をいち早くお伝えできるよう鋭意努力していく所存です。

今後とも限りないご支援をよろしくお願いいたします。

大田原赤十字病院 総務課 伊藤 健一

大田原赤十字病院広報誌たわら NO.1

発行日 2008年1月1日

発行者 大田原赤十字病院
〒324-8686 大田原市住吉町2-7-3
<http://www.ohtawara-jrc.com>

TEL 0287-23-1122 FAX 0287-23-3004

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷